
人の本質本音はいつも一緒にいても分からない

篠原 つぐみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人の本質本音はいつも一緒にいても分からない

【コード】

N2986P

【作者名】

篠原 つぐみ

【あらすじ】

銀魂界の常識をくつがえした作品。まさかの行動ww

(前書き)

鬼兵隊ファンには少し辛いかもしれません。

第1章

密かな裏切り

また子が晋助から受けた依頼。しかし彼女はその後数週間任務を遂行せずにはいた。

ある時晋助に事情を聞かれたまた子。

色々あつて進まないと謝り完了次第報告するとは伝えたがそれから更に数週間し、ようやく報告をした。

「随分遅かったな報告が」

「私だつて、そんなに1つの任務にばかり集中出来るほど暇じゃないっす。」

「…そうか。次からはなるべく急ぎで頼むぜ」

「了解っす」

嘘だつた。本当は晋助の指示をまともに遂行する気なんてさらさらなくなつていた。

第2章

裏切りは突

然に

いつものように戦艦の先端：甲板で煙管を吹かし海を眺めていた晋助。
突然背後に何かの気配を感じる。

敵ではない。明らかに仲間。

自分の後頭部に突き付けられたピストルを横目に見てピンと来るが

動じない。

「また子。何のつもりだ？」

「見て分からないっスか？」

「…ククっ…飼い犬に手を噛まれるたあ…こういう事なんだからなあ。何で今になって？」

「今まで晋助様は頭と言う立場を利用して私達に何かと無茶な事を頼んできたっス。」

「そりゃ最初のうちはそれで晋助様が喜ぶならと素直にやってきたっスけど…」

「最近何だかその内容もエスカレートしてきた気がして。」

「もうこれ以上…晋助様を頭にしておく事は出来ないっス」

「オレが死んで…隊はどうなる？てめえが頭になるのか？」

「それともオレを消しててめえも消えて隊を消すのか？」

「黙るっス！直頭の任務を下ろされる事になる晋助様にこの隊の未来を」

「予測する資格はないっス」

「…そうか。コイツは参ったなあ。」

「急に手え噛まれたと思ったら今度は引き裂かれる勢いだもんな。」

「とんだしつけをしちまったもんだ。」

「もつと…上品に育ててきたつもりだったがあ。」

「うるさいっス！晋助様あなたは私達を…仲間と言うより飼い犬として見てたっスか！」

「…ああ。そうだ。」

ピストルの引き金に指を当てるまた子。

「最低っス！それで段々頼みがエスカレートしてたっスか！」

「そいつは違うな。頼みの内容が重大になってったのはこれまでできてもらった事を」

判断した上で実力を認めて芸のレベルを上げた。それだけの事だ」

「レベルとか芸とか…結局はペットと同然の見方じゃないっすか」

「そう言ったる？てめえらはオレから見たら飼い犬に過ぎねえ。

それ以上でもそれ以下でもねえさ。

どうした。犬は常に飼い主に忠実だろ。

飼い主に牙を向くような犬は見た事ねえぜ。

頭の指示に従わず頭に牙を向くてめえらは…

言う事も聞かずに飼い主に牙を向く飼い犬と大差ねえよ。」

ポロポロと泣きながら銃口を反らさないまた子。

「晋助様が人の気持ちなんかほとんど気にしない人だって事は

薄々気づいてたっすけど…

こんな矢礼な人だとは思っても見なかったっす！

最低…消えるっす！

…サヨナラ晋助様」

ズドン！

響く銃声。

晋助はその場でバランスを崩し海へ後頭部から流れ出た血が水を赤く染める。

沈んでいく晋助。銃声に驚き万音が出てきた。

「また子殿。何をしたでござるか？とんでもない銃声が…また子殿？」

震えて泣いているまた子。ピストルは彼女が力なく下げていた。

「また子殿。晋助どこに行ったでござるかな」

何も言えないまた子。

瞳孔は異常なまでに開き目は焦点が定まらずやたらに泳いでいた。明らかに異常な反応を見て万斉はハツとする。

「また子殿…主その銃で晋助を…」

俯き無言で涙を流し続けるまた子。

「…これで良かったんすよ。これ以上晋助様が頭でいたらこの隊は終わり…」

「そんな感じがしてたんすから。」

「あの時…万斉先輩結局出来なかったっすけど真選組を潰すつもりで行けなんて…」

いくらなんでも無理があるっす。

万斉先輩もそうは思わなかったっすか？」

「…うむ。しかし拙者らは部下。頭の指示は絶対でござるからな」

「…最近…晋助様が私達に頼む内容は徐々にエスカレートしてきてたっす。」

万斉先輩も少しは気づいてたかもしれないっすけど…

晋助様は私達を仲間や部下と言うより飼い犬として見てたっす。」

「うむ。だが拙者達は晋助をそう言う頭と…そう言う男として見てきて

着いてきたのではなかったでござるか？」

「…今日になって見ちゃったんす。晋助様の…やたらに失礼な面を」

「それで…やったのでござるか？他に何か」

「何があるっすか！他に何かあるって言うっすか！

晋助様は…昔から鬼兵隊の頭だっただけにだいぶ調子に乗ってたっす。」

あの人がいる以上…隊の悪循環が止まる事はなかったと思うっすから。」

「……また子殿。主は隊の流れを変えたいがあまり重大なミスをしたでござるな。」

「重大なミス？」

「晋助がこの隊にとって重要な人物…そうと分かっていたから、晋助を襲撃する奴は

許さず晋助を護ってきたのではないでござるか？」

「それがそもその間違いだったのかもしれないっすね。」

自分の背中には常に私に護られてると…

思い込んで信じきって…私を利用するように。」

「頭として…信頼出来る部下を利用するのは当然かと。」

「……良かったんすよこれで。もう晋助様の事は忘れた方が良いでしょう。」

「また子殿…」

身心共に闇に迷ってしまったまた子。溢れ出る涙を堪えながら自室に引き返した。

晋助が沈んで行ったであろう場所をひたすら見つめ続ける万斎。

第3章

後悔のその

先へ

自室で状況を整理しながら涙を流し続けていたまた子。後悔がないはずもない。

あれほどまでに慕っていた頭を…自らの愛用の武器で殺めてしまったのだから。

「晋助様…ごめんなさいっす。」

でも…あなたがこれ以上いたら、この隊はそれこそ終わってしま
うっす。

鬼兵隊は…頭は…」

何も考えていなかったまた子。

何も考えずに…晋助を消してしまったのだ。

この先の隊の事…

どうすれば良いのかまるで分からないまた子。

泣いていても始まらない。

掃除や料理・晋助の部屋整理などで気を必死に紛らわそうとする。

が・・・

そんな事で気が紛れる訳もない。

隊に不可欠な頭を自らの手で殺めてしまったと言つ変わらぬ事実。

晋助に向かい引いた引き金の感覚が手から抜けることはなかった。

晋助なしで鬼兵隊を続けていける訳もない。鬼兵隊は事実上解散。

メンバーは各々の道へと散って行ってしまった。

また子は…行く先もなく途方に暮れ彷徨い続ける事となる。

(後書き)

銀魂界の常識をくつがえした作品。

まさかの行動に息を飲む・・・かもしれないWWW

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2986p/>

人の本質本音はいつも一緒にいても分からない

2010年12月10日19時38分発行